

【審査論文】

社会福祉を学ぶ学生が感じる楽しさ、難しさと学び方に基づいた 授業の工夫の必要性に関する研究

佐藤まゆみ

A Study on the Necessity of the Devices in the Courses based on the Student's Delights, Difficulties and the Ways of Learning

Mayumi SATO

要旨

本研究は、本学生活環境学類においてコース選択を終え、社会福祉士国家試験受験資格取得を目指すことが推定される2年生を対象に、社会福祉に対する関心や感じている楽しさや難しさ、学び方をはじめ、社会福祉の現場や相談援助等のイメージづくりに寄与するための授業の工夫の必要性を探ることを目的とした。質問紙法を用いて、特にKJ法による質的データの分析に重点を置いた。

本学類の学生が福祉に関心を持ったきっかけは、半数強が大学の講義や演習であり、福祉の仕事への関心も高かった。福祉を学ぶ「楽しさ」には、「知識としての社会福祉」と「生活としての生活の中の社会福祉」において、新たな知識の獲得や実践的な学びが挙げられた。「難しさ」には、「社会福祉と近接領域の専門知識を習得すること」と「相談援助の多様性やそれへの対応方法・技術の理解や習得」が挙げられ、学生が感じる理論と実践のギャップを埋める支援の必要性が考えられた。「福祉の学び方」には、「授業内容を整理する方法、ツール」、「学んだ知識・技術を実践的に理解する方法」が求められていた。

分析結果から、「実践的あるいは体験的な学び」によって社会福祉を理解できるような仕掛けが重要であることが明らかになった。講義や演習それぞれの特徴や限界もあるが、上述の学び方は学生の関心や意欲を刺激する可能性が高いことも推察された。以上を意識した授業の工夫が必要であると考えられた。

I. 研究の背景

狭義の社会福祉分野は、高齢者福祉、障害者福祉、子ども家庭福祉等、多岐にわたる。国家資格である社会福祉士は、相談援助に関する知識、技術を併せ持つ専門職として、その活躍が期待されている。

和洋女子大学（以下、本学）では、平成15年度より家政学を土台とする学部（現在は家政学群生活環境学類。以下、本学類）において、社会福祉士養成を始めた。学生が社会福祉を学び始めたきっかけや動機づけは様々であるが、その動機づけや学び方が、その後の学習意欲や進路選択に関して様々な影響を与える。

松本ら¹⁾の看護・福祉系学生の学生生活に関する意識調査によれば、学生に「重きが置かれていること」と「目標としていること」として、「実習」「専門科目」「専門の国家資格」「専門職への就職」に関する項目が非常に高い得点を示した。その結果を「大学における学修項目が国家資格取得や就職に直結してい

る看護・福祉系学生の現実であり、それらに積極的に向き合っている様子であると受け止められる。」と分析し、「しかし、一方でそれらが強調される学生の意識には一種の窮屈さも垣間見える。」と、回答の背景には専門職養成課程の過密スケジュールや家族の期待、社会情勢等が反映されていることが推察されしていると述べている²⁾。

また、藤縄ら³⁾は、授業・実習についての調査をもとに「実習ドリルブック」を開発しているが、専門職を目指す学生が1年次より2年次に「専門職への関心が高まった」という項目が低下したことについて、「本学のカリキュラムが2年次になると専門科目が急激に増えるため、学生は勉強が忙しくなり、目の前の課題をこなすのに追われ、ゆとりを無くしていると考えられる」と分析した。その結果を受け、「カリキュラム編成や授業方法、学内実習や課題の出し方などを検討する必要があることを示唆している。」と述べている⁴⁾。社会福祉士養成は平成20年度より新カリキュラム体制に移行し、専門科目がさらに細分化されるなど、学生が関心や動機づけを保持しつつ学ぶことができるよう授業の工夫をする必要性がうかがえる。

安田⁵⁾は、社会福祉系大学間でかなり差があるが、専攻と就職が結びつく場合は多いと指摘し、社会福祉学部の学生における職業への関心の形成過程を報告している。結果として職業選択は、社会福祉への関心が育まれることや家族、友人、社会情勢等による影響があることが指摘されている。さらに、学生の社会福祉へ興味をもつようになったきっかけや学生生活等を質問紙調査によって明らかにしている⁶⁾。

学生が社会福祉士国家試験受験資格（以下、受験資格）の取得を目指すことは、一つの関心の表れであることは間違いない。受験資格に直結する専門科目では、社会福祉学、各福祉分野等の理論、制度・法律、具体的サービスや相談援助理論・技術を学んでいくこととなる。これまで本学では、毎年約20～30名ほどが受験資格の取得を希望してきた。しかしながら、社会福祉士養成課程における学習は専門的で多岐にわたっており、先述した学生のある種の窮屈さもあいまって、4年制大学の養成課程に所属する学生が継続的に関心をもって学ぶことは、本学に限らず大変なことであり課題でもある。一方で、4年間のうちに社会福祉への関心、職業への関心が形成され、深化していくこともまた事実である。

そこで、授業において学生の社会福祉に対する関心や動機づけを高めたり、社会福祉の現場や相談援助に対するイメージづくりに寄与するための学び方について、一定程度配慮する必要があるといえる。その配慮については、社会福祉に関わることへの動機づけを高めるような授業の工夫として取り組む必要があると考える。そこで、本学において筆者が担当する社会福祉の専門科目を履修している学生を対象に、社会福祉に対する関心や学習の楽しさや難しさ等を調査し、それに対応した授業の工夫の必要性に関する研究を実施することとした。

Ⅱ. 研究の目的

本研究は、先述のとおり学生の社会福祉に対する関心や動機づけを高めたり、社会福祉の現場や相談援助に対するイメージづくりに寄与するための授業の工夫に求められること、その必要性を探ることを目的とする。そのため、社会福祉士の相談援助において基本となり、かつ専門的な内容を含んでいる相談援助の理論と方法について学ぶ専門科目を履修中でかつ下記の属性を持つ学生に対して、社会福祉を学ぶきっかけや学ぶ楽しさ、難しさ等を調査し、分析することとした。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査方法

本学において、社会福祉士国家試験受験資格を取得しようとしている学生が、以下2の調査項目に示す事柄についてどのような意向を持っているか、「社会福祉分野に対する学生の関心に関する質問紙調査」として、調査を実施した。調査対象となる学生は、本学の生活環境学類においてコース選択を終え、かつ将来社会福祉士国家試験受験資格を取得することを目指すことが推定され、筆者の講義を履修している2年生19名に対する全数調査である。調査日は、2010年7月19日である。

2. 調査項目

調査項目は、属性に関わる「学生の社会福祉に対する関心」を把握するために尋ねているもの、「社会福祉の授業に関する楽しさや難しさ」、「授業の理解をより促進するためにあったらよいと思われること」を把握するために自由記述で尋ねているものとの2種類で構成している。

（1）学生の社会福祉に対する関心

これについては次の4つを柱としている。

①「社会福祉学のどの分野に関心があるか」

社会保障や公衆衛生を除くいわゆる狭義の社会福祉に関して、学生に関心のある分野を尋ねた。これは、学生の興味関心、将来展望に結びつく項目である。

②「先の項目で回答した福祉分野に関心を持ったきっかけ」

学生が社会福祉を学ぶこととなった動機付けをみる項目である。

③「将来の職業の選択肢として社会福祉の仕事に関心があるか」

学生が社会福祉分野の職業を将来の選択肢のひとつとして意識しているか否かをみる項目である。

④「先の項目で回答した職業の選択肢として社会福祉の仕事に関心を持ったきっかけ」

学生が社会福祉分野の職業を将来の選択肢のひとつとして挙げることとなった動機づけをみる項目である。

本研究では（1）について学生の福祉への関心を検討したうえで、以下（2）の質的部分の分析を重視した。

（2）社会福祉の授業に関する楽しさや難しさ、理解を進めるための学び方

①調査項目の内容

これは、質的な内容を把握するためのものである。学生にとって社会福祉を学ぶ「楽しさ」は、学習意欲や資格取得等にプラスの影響を与えられと考えられる。逆に、社会福祉を学ぶ「難しさ」は、学生にとっては乗り越えなくてはならない課題のひとつである。そこでさらに、学生にとってどのような「学び方」が難しさを乗り越える助けになるのかを考える必要がある。上記についてそれぞれ自由記述で尋ねることとした。

②分析方法

自由記述については、KJ法A型図解の手法を用いて分析した。いつでも元のデータをたどれるよう、ラベルを保存し、グループ化のプロセスを記録した。さらに図解をB型文章化によって叙述化することにより、授業の工夫に求められることを探る考察を試みた。

(3) 倫理的配慮

本調査の目的については、調査票上に①授業の工夫に用いる参考資料とすること、②研究報告書等において結果を用いること、③個人が特定されることのない工夫をすること、④回答用紙の保存等について記載のうえ、説明した。これらの件について、学生の回答をもって承諾したものとみなした。

Ⅳ. 研究結果

1. 学生の福祉に対する関心

ここでは、特に回答者の社会福祉に対する関心について尋ねた。

(1) 関心のある福祉分野

これについては、表1のとおりである。高齢者福祉、子ども家庭福祉への関心が高く、あわせて7割程度であった。

表1 関心のある福祉分野

| | 度数 (%) |
|---------|------------|
| 高齢者福祉 | 6 (31.6) |
| 子ども家庭福祉 | 7 (36.8) |
| 障害者福祉 | 3 (15.8) |
| 地域福祉 | 1 (5.3) |
| 欠損値 | 2 (10.5) |
| N | 19 (100.0) |

注 欠損値はシングルアンサーのところ複数選択していた

表2 関心を持ったきっかけ

| | 度数 (%) |
|----------|------------|
| 高校の授業 | 1 (5.3) |
| 大学の講義・演習 | 10 (52.6) |
| ボランティア活動 | 1 (5.3) |
| その他 | 6 (31.6) |
| 無回答 | 1 (5.3) |
| N | 19 (100.0) |

(2) 社会福祉に関心を持ったきっかけ

これは、社会福祉を学ぶことを選択する動機付けにおいて重要な項目である。表2に示すとおり、大学の講義や演習が52.6%と多く、次いでその他が31.6%となった。その他の回答の主旨は、「子どもが好きだから力になりたい」、「祖父母（家族）がきっかけ」、「障害のある小学校の同級生や親類とのかかわりがきっかけ」、「中学の講習会がきっかけ」であった。そのうち、家族や同級生など身近な人がきっかけになって社会福祉に関心を持った学生が4名であり、先述の先行研究と類似した結果となった。

(3) 福祉の仕事への関心とそのきっかけ

表3に示すとおり、福祉の仕事への関心が「ある」、「ややある」をあわせると約90%であり、学生自身の職業選択のひとつとしての期待が垣間見られた。

一方で、福祉の仕事への関心が「ややない」、「ない」と回答した学生もごくわずかではあるがいた。関心が「ややない」、「ない」と回答した主旨としては、「認知症や障害のある人との関わる際、広い視野をもって少しでも理解できる知識があれば良いと思ったから」、「社会の流れがわかっていればよいと感じる」という理由が挙げられた。学生の中には、将来的な仕事として意識しているというよりは、生活や人との関わりの中で福祉の必要性に関心を持ち、知識や技術を得たいと考えている者がいることが読み取れる。これは、家政学を広く学び、その上に社会福祉の専門的知識を積み上げる本学類の特徴のひとつととれる。

表3 福祉の仕事への関心

| | 度数 (%) |
|------|------------|
| ある | 11 (57.9) |
| ややある | 6 (31.6) |
| ややない | 1 (5.3) |
| ない | 1 (5.3) |
| N | 19 (100.0) |

表4 関心をもったきっかけ

| | 度数 (%) |
|----------|------------|
| 高校の授業 | 1 (5.9) |
| 大学の講義・演習 | 8 (47.1) |
| ボランティア活動 | 3 (17.6) |
| その他 | 4 (23.5) |
| 欠損値 | 1 (5.9) |
| N | 17 (100.0) |

注 表3においてある、ややあると回答した学生（17名）のみ回答。欠損値はシングルアンサーのところ複数選択していた

（4）福祉の仕事に関心を持ったきっかけ

表3で福祉の仕事への関心が「ある」、「ややある」と回答した学生に対し、関心をもったきっかけをたずねた。表4に示すとおり、「大学の講義・演習」が47.1%、次いで「その他」23.5%、「ボランティア活動」17.6%、「高校の授業」5.9%と続いた。

なお、「その他」を選択した学生の関心をもったきっかけの主旨は、「母親や祖母等家族によるもの」、「小学校の特別支援学級の教員の姿を見たこと」、「中学の講習会」、「社会的ニーズが高いと思ったこと」が挙げられており、家族や大学の講義等何らかのきっかけで社会福祉そのものに関心を持った学生は、福祉の仕事への関心も持っている可能性がある。

以上の傾向から、社会福祉そのもの、社会福祉の仕事への関心は、大学入学前に家族や周囲の人から影響を受けて芽生える場合と、大学に入学して授業や演習を通じて関心を持ち始めたり、さらに関心が高められていく可能性があることが示唆された。学生が卒業までの間に一定の専門的知識・技術を身につけるためには、学生自身が継続的に社会福祉に関心を持って学ぶ必要がある。

したがって、学生が社会福祉を学んでいて「楽しい」、「難しい」と感じていることを両面から把握し、大変なことがあってもそれを乗り越えて学ぶことが楽しいと感じられ、社会福祉の視点を生活に活かすことができる力をつけるための方策を講じる必要性がある。そこで、養成課程の講義や演習を通してそれを支援するために求められることを明らかにするため、以下の分析を試みた。

2. 質的部分に関する結果

（1）自由記述の項目とラベル作成のプロセス

本研究における自由記述部分の回答については、以下の表5に示した自由記述3問に対して、それぞれラベルを作成した。そのプロセスについては、表6の通りである。KJ法A型図解の結果は図1～3に示した。図解化の結果を以下に叙述化することとした。

表5 自由記述の質問項目

- | |
|--|
| <p>（1）社会福祉に関する科目を大学で学んでいて、楽しいと思うことはどのようなことですか。具体的にお答えください。</p> <p>（2）社会福祉に関する科目を大学で学んでいて、難しいと思うことはどのようなことですか。具体的にお答えください。</p> <p>（3）社会福祉に関する科目を大学で学んでいて、授業の中にこのような学び方があったらより内容を理解できそうだと、思うことはどのようなことですか。具体的にお答えください。</p> |
|--|

※（1）は楽しさ、（2）は難しさ、（3）は福祉の学び方と表現することとする。

表6 グループ化のプロセス

| 質問項目 | 得られたラベルの数 | グループ化のプロセス | 小グループ表札 | 中グループ表札 |
|------------|-----------|------------|---------|---------|
| (1) 楽しさ | 26枚 | 26→7→3 | 7 | 3 |
| (2) 難しさ | 28枚 | 28→9→4 | 9 | 4 |
| (3) 福祉の学び方 | 21枚 | 21→7→4 | 7 | 4 |

(2) 福祉を学ぶ「楽しさ」に関する構造の文章化と解釈

図解化の結果は図1を参照されたい。学生が福祉を学ぶ「楽しさ」の構造は、次のように説明できる。

まず、学生が福祉を学ぶ楽しさには、「授業（講義や演習）を通して教員から社会福祉の各分野の話を聞くこと」により、「知識としての社会福祉」と「生活としての、生活の中の社会福祉」を知ることが挙げられる。

「知識を得て社会福祉を理解すること」が楽しさのひとつである。その構造は次の通りである。「知識としての社会福祉」は、学生個々の「興味や関心」にそいながら、それまで知ることのなかった「新たな知識を得る新鮮さ、喜び」をともなって、「様々な福祉分野」があることを理解し、それぞれの福祉分野の「実情を知る」ことによって構成されている。様々な福祉分野、それぞれの実情を知りそれを理解することにより、学生は「達成感」を感じ、自分自身の「興味、関心」にそう学習であったと感じることにつながる。

一方、「体験を通して社会福祉を理解すること」がもうひとつの楽しさである。その構造は次の通りである。「生活としての、生活の中の社会福祉」は、演習での体験を通して「実践的に学ぶ」ことにより、「福祉の意義」や「人の様々な価値観、意見」、「高齢者や障害者等の置かれている状況」に対する理解や関心の拡がりを体験している。さらに、「実践的に学ぶ」ことによって高齢者、障害者、子どもなど多様な状況におかれた人々との関わり方、すなわち対人援助の「技術」も身につけることとなる。そこで、講義や演習で学んだことが「日常生活での活用が可能」であることに気づき、楽しさが生まれる構造となっている。

この「日常生活での活用」を可能にするためには、同時に「様々な状況を生きる人についての知見」を身につける必要があり、「知識としての社会福祉」と連動している。以上のように、学生が福祉を学ぶ楽しさが構造化されていることが明らかになった。

(3) 福祉を学ぶ「難しさ」に関する構造の文章化と解釈

図解化の結果は図2を参照されたい。学生が福祉を学ぶ「難しさ」の構造は、次のように説明できる。

まず、専門職の基盤にある「社会福祉と近接領域の専門知識を習得すること」が挙げられる。社会福祉は人間や価値に対する基本的理解に関する知識のみならず、「福祉の歴史、制度、理論等の専門知識」も求められる。学生はまず歴史や福祉制度、援助方法に関わる理論等を学ぶことを難しいと感じている。また、対人援助に不可欠な専門的知識として「専門用語」、「医学的知識」も併せて身につける必要があるが、学生は難しさを感じている構造がみられる。

一方、「相談援助の多様性やそれへの対応方法・技術の理解や習得」も難しさとして挙げられる。特に、理論的に「クライアントと相談援助の多様性」を学ぶと、それと同時に「クライアントの気持ちやニーズの把握」をすることも多様であることを学ぶこととなり、「理論と実践に活かす、変換することは難しい」と感じることにつながる。そのため、「相談援助のプロセス」を理解することも難しいと考える学生もいるが、理論と実践をつなぐための「現場実習」でそれらの難しさを体験的に整理することが必要となる

構造がある。

さらに、「社会福祉の現状と学びのギャップ」を感じている学生、「卒業後の就職の不安」を感じている学生がおり、専門的知識習得という個人の努力が求められる部分と質的に異なる配慮が必要な部分であることがわかる。これについては考察で詳しく述べたい。以上のように、学生が福祉を学ぶ難しさが構造化されていることが明らかになった。

（４）福祉の「学び方」に関する構造の文章化と解釈

図解化の結果は図３を参照されたい。これは、先の福祉を学ぶ「楽しさ」、「難しさ」を受けた設問であり、「福祉の授業の内容をより理解できそうなこと」として学び方に関する回答を求めた。学生が理解を深めるための「福祉の学び方」の構造は、次のように説明できる。

まず、専門科目を学ぶ際の「授業内容を整理する方法、ツール」の必要性が挙げられており、その内容にはテキストの内容の詳細な解説、パワーポイントやプリント等を用いてポイントを整理するなど、専門的知識をまとめる必要性がみられる構造がある。

このように身に付けた専門的知識について、「学んだ知識・技術を実践的に理解する方法」として、「事例によって理解すること」、「演習によって理解すること」の必要性も見られる。身に付けた知識をどのように活かすのかということについては、具体的な対人援助の場面を想定した「事例」や「演習」により定着させることが挙げられている。事例、演習を用いた理解は相互に関連しあって、より専門職の具体的な援助場面のイメージを作るという相乗効果が期待できる。さらに、知識を実践的に理解する方法としては、「実習・体験」として、「実際に見学したり、体験すること」、「分野ごとの実習」が挙げられており、学生から学内外での学びをあわせることが求められている。

「実習・体験」は、「福祉現場に迫るための方法、体験」のひとつであり、その他「VTR、映像」によって福祉現場、職場の様子をイメージできること、「テキストにない話、現場の人の話を聞く」というように、教員が福祉現場の様子を伝えたり、「実際の現場で働く社会福祉士から直接話を聞きたい」など知識としての学びとともに「体験としての学び」も求められている構造があることが明らかになった。さらにこのことは、様々な福祉現場や専門職として働く人に出会うことであり、学生にとっては直接「職業としての福祉を意識した学び」になることが理解できる。以上のように、学生が理解を深めるための学び方が構造化されていることが明らかになった。

V. 考察

（１）学生の関心に関する考察

本学での一つの特徴として、入学後に社会福祉への関心を持った学生が52.6%と半数を超えていることが挙げられよう。先行研究で学部と職業選択の関連について指摘されているとおり、社会福祉学部や学科である場合、入学以前に関心を持っている学生が多いと推察される。しかしながら、本学類では家政学を土台として学ぶ中で福祉系の講義等の影響を受けて関心を持ち、社会福祉を深く学ぼうと選択していることが考えられた。その意味で、１年次から社会福祉に係る基礎的な科目に触れることが学生の関心に影響を与えると推察された。

また、入学以前より身近な人々からの影響で社会福祉に関心を持っていた学生は、専門科目を学ぶことでより関心を強くしたり、福祉の仕事についても具体的なイメージを持って回答している可能性があるといえよう。つまり、福祉の仕事に関心があるといっても、２年次では社会福祉に関心を持った時期が入学

前か、入学後かによって多少回答の意味に差がある可能性が考えられる。今回、統計的な検定を目的とはしていないためその点は明らかにならないが、その点にも留意が必要である。

これらのことは、社会福祉士養成の視点とともに本学の特徴を踏まえた授業の工夫が必要であることを示唆しているといつてよい。

(2) 福祉を学ぶ楽しさに関する考察

福祉を学ぶ過程で感じる「楽しさ」は、学生が福祉をより深く学びたい、実際に人を援助する職業に就きたい、と考えることに至る動機づけを高めるために重要な要素のひとつである。一見、人と関わる技術を学ぶ「演習」のように実践的なことのみが「楽しい」ように思われがちであるが、構造化の結果として、学生自身が福祉の実情や新たな知識を理解できることを「楽しい」と感じている点は、非常に重要であり注目すべき点である。専門職養成の観点から考えれば、社会福祉士の専門性は専門的知識及び技術を基盤としているため、福祉を学ぶ学生が「楽しい」と思えることは養成課程で専門性の基礎を築くために有用であると考えられる。また、福祉を学ぶ「楽しさ」があれば、福祉を学ぶ「難しさ」についても学生が対応するような動機づけが働きやすくなることが推察され、継続的な学習にとって「楽しさ」は不可欠な要素であるといえよう。加えて、福祉への関心は福祉を学ぶ楽しさと無関係ではないと考えられる。

さらに、学生は単なる専門的知識・技術の習得のみならず、「学んだ福祉の知識や技術が生活の中に活かせる」ことが楽しいと感じている構造があることも明らかになった。このことは、人間が持っている生活様式や価値観、人間関係等の多様性に対する理解を深めていることを示すと考えられ、専門的な対人援助関係にとどまらず、日常生活における人間理解へと応用する力を養うことにもつながっていると考えられた。

(3) 福祉を学ぶ難しさに関する考察

福祉を学ぶ「難しさ」を構造化した結果、「社会福祉の現状と学びのギャップ」を感じている学生もおり、自分にできることがわからずに苦悩している実態が明らかになった。このギャップに折り合いをつけることが必要になるが、学生個人に委ねるだけでなく、教員も次のように配慮する必要があるといえる。例えば、3年次に実施する約1カ月間の「現場実習」によって実際の福祉現場を知ることにより、専門職の役割とともに限界を学ぶことで、できることとできないことを区別しギャップに折り合いをつけることとなると考えられる。これは実習指導者や教員に助けられながら、体験的に学生が乗り越える必要がある。さらに、学生がギャップに折り合いをつけることができたなら、自分にできないことを誰に託すかという社会福祉士に求められる「つなぐ」という視点を養うため、教員がさらなる気づきを促す必要性が考えられる。その意味で、専門的知識を教授する講義科目のほか、気づきを促す機会の多い演習科目を有効に活用することが求められる。

一方、難しさの中に「卒業後の就職の不安」を挙げた学生がいたが、これには2通りの解釈が成り立つ。ひとつは「卒業後に福祉現場に就職先があるのか」ということであり、もう一方は「就職先で専門職として人を支援できるか」ということであろう。前者については、自分が関心を寄せている福祉分野の現状や人材の募集状況をしっかりと把握することによって、ある程度解消することが可能である。一方、後者については、学生が実践的に学ぶ中でやりがいや自信を獲得しなければならない。そのため、現場実習や現場で働く社会福祉士の話を聴いたり、自らボランティア等で体験的に学ぶ必要があるともいえる。このような「社会福祉の現状と学びのギャップ」と「卒業後の就職の不安」については、学生が直面する現実

的な課題でもあり、どこかで緩和あるいは解消できるような働きかけが求められると考えられる。

さらに、図解に示した「社会福祉と近接領域の専門知識を習得すること」と「相談援助の多様性やそれへの対応方法・技術の理解や習得」は、両者が連動してこそ専門性の基盤を養うこととなるため重要であるが、学生には難しいと感じられていることが明らかになった。そのため教員に対しては、上述の内容を踏まえ、学生が福祉を学ぶ「楽しさ」を感じつつ「難しさ」を乗り越えるための工夫が求められるものと考えられる。

（４）福祉の学び方に関する考察

学生が専門的知識を身につけることに關して難しさを感じていることは、先述のとおり明らかになった。それをまとめるためのツールの多くは、教員に対する依頼として捉えられた。一方、学生自身が学びの途中でノートやプリントを整理し、ポイントをまとめることも効果的な学習のためには併せて必要である。そのため、教授法や授業展開の工夫とともに、学生に対し自主学習を促すことも必要であると考えられた。

さらに、専門職養成課程への要請として、学生が社会福祉の専門的知識と技術を同時に身につけることが挙げられる。そのため、学生が専門的知識をより深く理解するために、体験的あるいは実践的に学ぶ機会を設ける必要があることも明らかになった。社会福祉の基本的な領域は、高齢者福祉、障害者福祉、子ども家庭福祉、低所得者福祉等であり、本学の学生も概ねその範囲に関心が集中していた。本研究の結果から、社会福祉の授業の中で、それぞれの分野のエキスパートを演習や講義に招き、現場の実態や苦勞、喜びなどを伝えてもらう機会や各福祉分野の施設見学の機会を設ける検討の必要性もあると考えられた。場合によっては、授業外での学生の関心に応じたボランティア活動や福祉現場でのアルバイトを通じて体験的に福祉を知る機会も必要であると考えられる。

これらは、本学類の学生の関心からみれば、福祉の知識・技術を生活の中に活かす、専門職として活かす、この両面からの学び方と捉えられる。現在本学類では、社会福祉を学び卒業する学生の進路として、民間企業への就職が比較的多くみられるが、実習や福祉現場の見学、現場の話を聞くなど体験的に学ぶ機会が増えれば、専門的知識の実践的獲得とともに「職業としての福祉を意識」する学生も増えるのではないかと推察された。

Ⅵ. まとめと今後の課題

以上のように、本学類において社会福祉を学んでいる学生の関心、イメージ作り等に寄与する授業の工夫に求められることを述べてきた。本研究では、社会福祉への関心について単純集計結果を示し、さらにKJ法A型図解とB型文章化により社会福祉を学ぶ「楽しさ」、「難しさ」、「学び方」それぞれの構造化の結果と考察を述べてきたが、楽しさ、難しさ、学び方の分析結果を総合すると、「実践的あるいは体験的な学び」によって社会福祉を理解できるような仕掛けをすることが重要であることが明らかになった。講義や演習それぞれの特徴や限界もあるが、「実践的・体験的な学び」は学生の関心、学ぶ意欲を刺激する可能性が高いことも構造化から推察された。その点を意識して授業の工夫に取り組むこととしたい。

最後に、本研究は本学生活環境学類における限定的な属性をもつ2年生に対し調査を行ったものであり、社会福祉士受験資格を希望する3、4年生を含む学生の全体像を示しているわけではない。しかし、2年生は社会福祉コースの選択をし、社会福祉を広く学ぶことを選択した学生であるため、この時期の学生の意向は非常に重要である。本研究の結果を参考に、上級生に対しても必要な支援をする必要性があるといえるだろう。

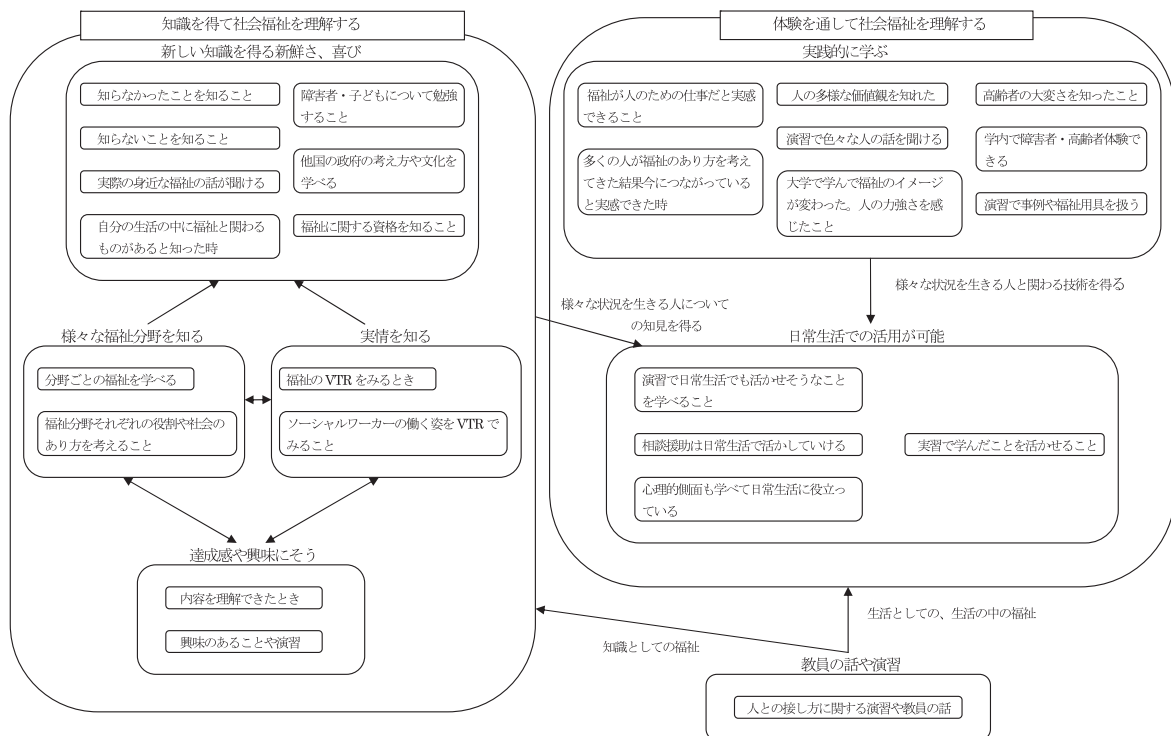


図1 社会福祉を学ぶ楽しさの構造

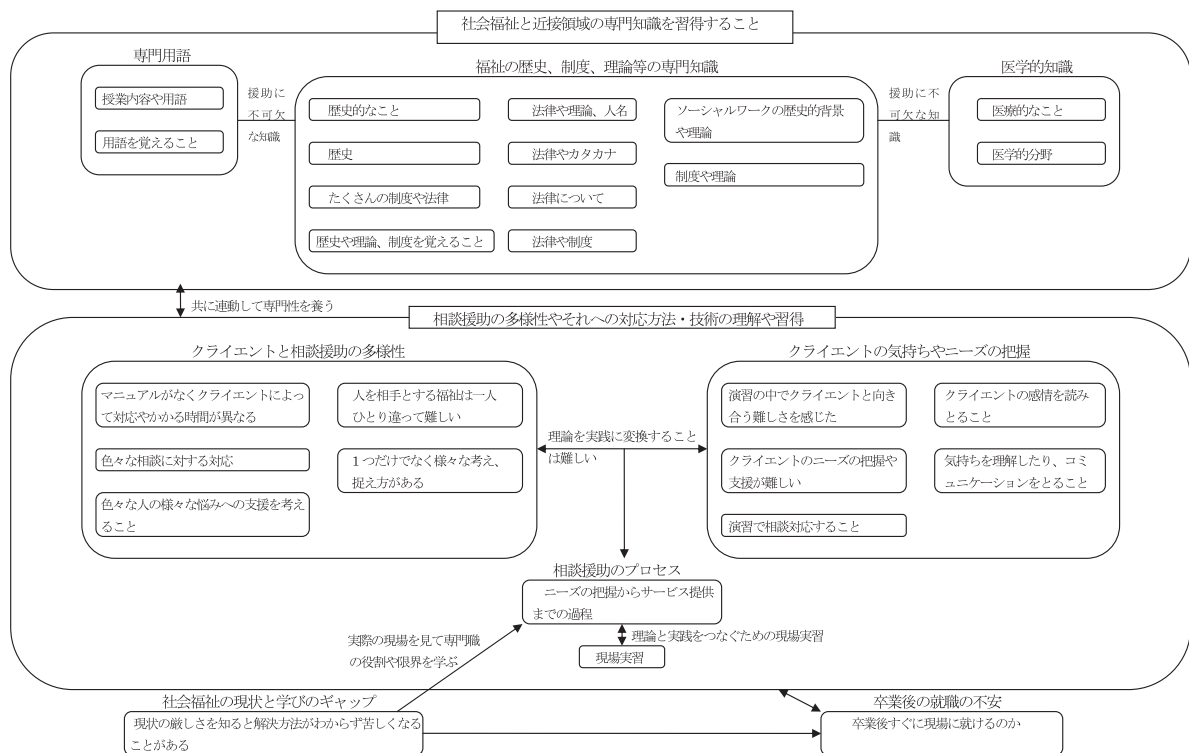


図2 社会福祉を学ぶ難しさ構造

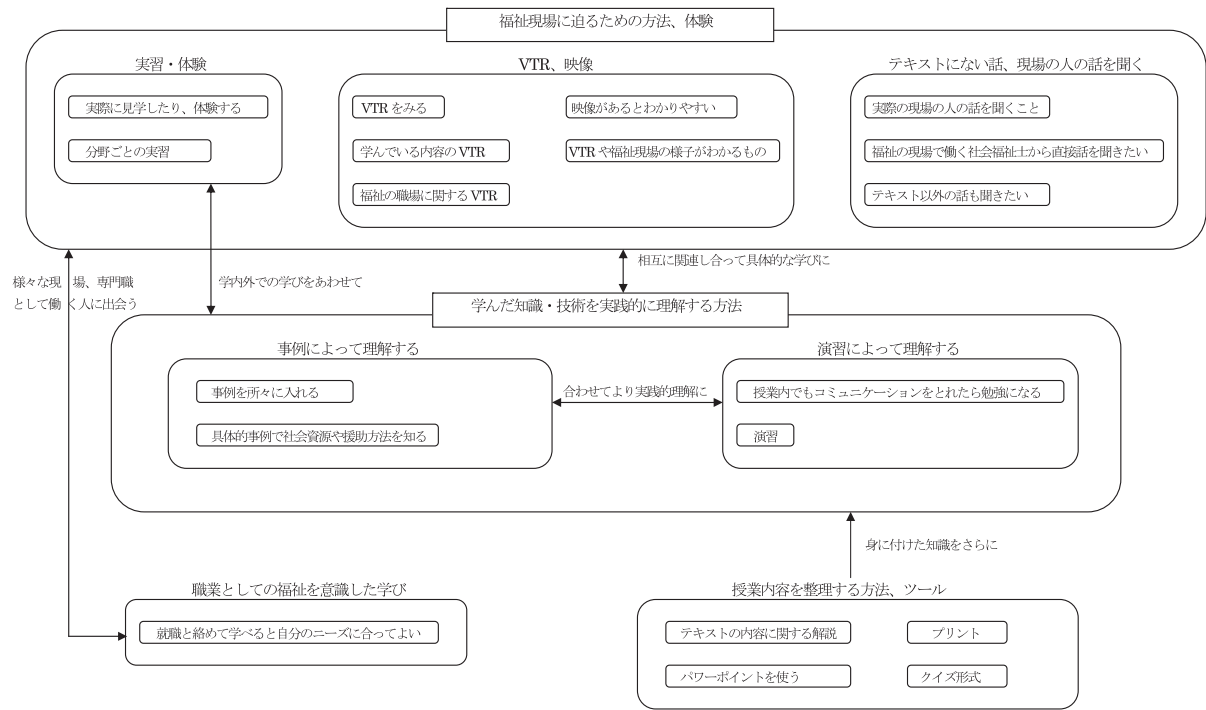


図3 社会福祉をより理解するための学び方の構造

注

- 1) 松本浩幸, 隆朋也, 横川剛毅. 看護・福祉系学生の学生生活に関する意識. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要. 2005, No.13, p.105-114.
- 2) 前掲論文1) p.113.
- 3) 藤縄理, 水野智子, 谷合義旦ほか. 専門職に対するアイデンティティの入学期の違いと継時的変化の分析-学習ドリルブック開発のための基礎調査(第3報). 埼玉県立大学紀要. 2001, Vol. 3, p.63-69.
- 4) 前掲論文3) p.68.
- 5) 安田三江子. 本学学生における職業への関心の形成課程-社会福祉学部一回生の調査から-. 花園大学社会福祉学部研究紀要. 2001, 第9号, p.83-101.
- 6) 前掲論文5) p.84.

参考文献

- 宮本益治. 短大入学生の社会福祉への関心と福祉教育-福祉意識の動機づけと教育方法をめぐって-. 東海学園女子短期大学紀要. 1991, 26, p.1-15.
- 山口雅功. 学生が関心を有する福祉領域-講義「研究法の基礎」の反省として. 人間の福祉. 2002, 12, p.93-102.
- 安田三江子. 本学〔花園大学〕学生における職業への関心の形成過程-社会福祉学部一回生の調査から. 花園大学社会福祉学部研究紀要. 2001, 9, p.83-101.
- 川喜田二郎. 発想法. 中公新書. 1967, 220p.
- 川喜田二郎. KJ法 渾沌をして語らしめる. 中央公論社. 1986, 581p.
- 川喜田二郎. 問題解決学KJ法ワークブック. 講談社. 1970, 203p.

佐藤まゆみ (和洋女子大学生生活科学系助教)

(2010年9月21日受付 2010年11月16日受理)